

難波西鶴と海ノ道

[22]

森田 雅也

前回より西鶴の『日本永代蔵』元禄元(1688)年刊「巻二の五」舟人馬かた鏡屋の庭」に描かれた酒田の豪商「鏡屋」の様子を取り上げています。

雪深い山形の庄内は半年近く、人もモノも交流が絶たれます。芭蕉が『奥の細道』の旅に出たのは元禄2(1689)年3月27日のことです。新暦では5月16日にあたります。同年9月6日(新暦10月18日)、大垣に到着するまで歩いた旅はたぐみに東北の雪を避けています。

酒田の豪商「鏡屋」

よつです。「好色一代男」で酒田の世之介が米商人として長期滞在していたように、商人にとって何よりのものなれば、宿泊場所の提供は当然のことです。

巻二の五では鏡屋の様子さらさら続きです。「亭主、年中袴を着て、すこしも腰をのさず。内儀は、かるひ衣装をして、居間をはなれず、朝から晩まで、笑ひ顔して、なかなか上方の間屋とは各別、人の機嫌をとり、身過を大事に掛けける」と上方の間屋のようにお高くとまらず、鏡屋の亭主も女房も率先して接客に務め、客のもてなしに余念がないというのです。

「おまけに」都にて運葉女といふを、所詞にて「しやく」といへる女三十六七人、下に絹物、上に木綿の立て鳴を着て、大かた今織りの後ろ帯、これにも女がしら有りて指図をして、客に一人づつ、寝道具あげおろしのために付き置きける」というのです。

「運葉女」とは、得意客の接待、給仕、寝所の相手などをとつとめた女を指します。かつて軽はずみな、品行の悪い女を「はすっぱ」

などと呼びましたが、ここに由来しています。客の給仕や夜とぎをする女を大勢雇うとは、いかなる間屋かといふがしく思われるかも知れませんが、これも当時の社会通念からすれば、若い手代などの長い旅のぶりょうを慰めるサービスの一つといえるでしょう。

「寝道具あげおろし」は、その職種の方です。一人ずつ付けて、その差配役まで置くといふのは、少しサービス過剰の鏡屋のありさま。もっともこれは西鶴独特のユーモアかもしれませぬ。

いたれりつくせりのもてなし

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)